

Eric Jorink, *Reading the Book of Nature in the Dutch Golden Age, 1575-1715* (Brill's Studies in Intellectual History 191; trans. Peter Mason; Leiden: Brill, 2010), xxii, 472; US\$172.00, €133.00; ISBN 978-9004186712.

加藤喜之

(東京基督教大学神学部助教)

初期近代のオランダは、しばしば近代科学の知的土壌といわれてきた。デカルト (René Descartes, 1596-1650) やホイヘンス (Christiaan Huygens, 1629-95) そしてスピノザ (Baruch Spinoza, 1632-77) が活躍したのがオランダであるからだろうか、この国の精神風土は合理主義的で物質主義的だと認識されている。近年では、プリンストン高等研究所の J・イスラエルによる「ラディカルな啓蒙主義」というテーゼが、このような初期近代のオランダ像をより強固なものとしている。ラディカルな啓蒙とは、唯物論的に解釈されたスピノザ主義だ。イスラエルはこの思想がフランス革命につながる「近代」をつくり出したという。しかしながらこのような考え方にたいして、ライデン大学とホイヘンス研究所 (Instituut voor Nederlandse Geschiedenis, ING) に所属する E・ヨリンクは、本著『オランダ黄金期において自然の書物を読む——1575-1715年』(2010年) で異なった初期近代オランダ像を提示していく。

ヨリンクのテーゼは、黄金期のオランダの知的風土は決して反形而上学的でも物質主義でもなく、むしろ自然は神の啓示の「第二の書物」と理解されていたというものである。特にネーデルランド改革派教会のもたらしたアウグスティヌス・カルヴァン主義神学の影響は強く、自然はそれ自身で理解されるのではなく、聖書に準ずる神の啓示の手段としてみられていた。もちろん「自然の書物」*liber naturae* という用語自体は改革派の専売特許ではない。バラケルスス (Pracelsus, 1493-1541) やモンテーニュ (Michel de Montaigne, 1533-92) そしてガリレオ (Galileo Galilei, 1564-1642) も、自然探求と独自の哲学を形成するなかでこれを使用していた。だがオランダにおけるこの概念は、あくまで改革派神学の枠組みのなかで理解されるのがふさわしいとヨリンクは主張する。バラケルススやモンテーニュやガリレオはあくまで超自然的な啓示との調和を求めることなく、自然自体の理解を「自然の書物」と呼んでいるからである。

聖書解釈の伝統に加えて、オランダ黄金時代にはもうひとつ重要な知の枠組みがあった。それはアリストテレス（前 384-322）やガレノス（129-200 頃）そしてプリニウス（22-79）の著作を解釈する人文主義的な古典学の伝統である。これは在欧の科学史研究者ヒロ・ヒライが『医学的人文主義と自然哲学』（2011 年）のなかで言及していることだが、この時代において自然哲学者は人文主義者でもあった。それゆえあらゆる自然現象は、聖書と古典の枠組みのなかで理解される。いうなれば、現象の観察と古典の解釈はお互いに補完しあうのである。

ヨリンクはもちろんデカルトやスピノザの合理主義の伝統を軽視しているわけではない。ユトレヒトやライデンでのデカルト主義をめぐる 1640 年代の論争とその後の展開をみても、デカルトの思想は大きな影響をオランダの知的文脈に及ぼした。スピノザも同様である。これらはユトレヒト大学の T・ファベイクやロッテルダム大学の W・ファン・ブングの研究が明らかにしてきたことである。しかしながら十八世紀にはいるとオランダのデカルト主義は、ニュートンの影響を受けた物理神学 (physico-theology) の伝統に取って代わられる。そして後者は興味深いことに、正統的なカルヴァン主義神学の啓示と自然という二つの神の書物の伝統を保持していくことができた。それゆえ、オランダにおける自然理解の発展は、非合理的なものから合理的なものへという経過はたどらず、自然を理解する神学的な枠組みが、十六世紀から十八世紀にかけて連綿と続いていたのである。

本書の核心部である第三章から第六章は、彗星、昆虫、驚異、奇事異聞の解釈史が多様な事例とともに描き出されている。ではなぜ彗星や昆虫なのだろうか。当時の神学的な文脈のなかで、これらは神の奇跡的、あるいは超自然的な業の現れとして理解されてきたからである。不変的な自然の法則の下での現象としてではなく、世界を創造した神の栄光が自然現象を通して木漏れ日のように照らされるとでもいえようか。正統派カルヴァン主義神学者であるヴォエティウス (Gisbertus Voetius, 1589-1676) が、詩篇十九篇の注解書で語るように、自然は神の栄光を写し出しており、その栄光への応答として人間は驚嘆 (admiratio) をもって神を誉め称える。アウグスティヌスも詩篇四十五篇の注解で同様のことを語った。いずれにせよ、この時代の自然哲学者たちは、聖書の記述を基礎に、アリストテレスやガレノスやプリニウスの古典を読み、神を誉め称えていたのである。

では何が変化したのだろうか。ヨリンクが目にするのは人文主義による本文批評の伝統である。十六世紀の宗教改革にも大きな影響を与えたエラスムスに代表される人文主義は、オランダ黄金時代において飛躍的に発展した。ライデン大学を中

心として活躍したリプシウス (Justus Lipsius, 1547-1606)、スカリゲル (Joseph Justus Scaliger, 1540-1609)、フォシウス (Gerardus Vossius, 1577-1649) といった人文主義者は、古典のテキスト・クリティークの技術を革新的に高めていったのである。それによって古典の権威は相対化されることになり、より自由に自然現象を観察、分析することが可能となった。勁草書房から2015年8月に刊行されたA・グラフトンの『テキストの擁護者たち：近代ヨーロッパにおける人文学の起源』(原書は1994年)には、カゾボンによる1614年の『ヘルメス文書』への有名な批判に一章が割かれている。この批評によってルネサンス期に栄華を極めた『ヘルメス文書』の権威は次第に失墜していく。

人文主義者たちによる原典批評は、『ヘルメス文書』といった異教徒の古典に留まらず、聖書にも及ぶことになった。先述のライデン大学のスカリゲルは、新約聖書の歴史的な記述に疑問をもつ。彼はこれを公表することはなかったが、その弟子たちはさらにラディカルな本文批評を聖書に加えていく。また、1655年に出版されたラ・ペイレール (Isaac La Peyrère, 1596-1676) による『アダム以前の人間』は、創世記の歴史性に疑問を付した。ついでにいえば、スピノザの『神学・政治論』(1670年)にみられるラディカルな聖書批判は、その独自性よりもむしろこのオランダ人文主義の伝統のなかに位置づけられるべきであろう。

ヨリンクによると、古典や聖書の備えていた権威の批判は、それまで以上に自由にまた直接的に自然現象を神学的な枠組みのなかで解釈することを可能にした。これらの権威の批判は「自然の書物」の概念の否定につながったのではない。聖書と古典を批判することによって、合理主義が生まれたのではなく、神学の枠組みは守られつつもより近代的な科学が創発したとヨリンクは主張しているのである。この知の枠組みは、オランダにおいて多少の変化を伴いつつも大枠では十九世紀まで守られていく。

最後に短くではあるが、本書をより大きい知的文脈のなかに位置づけてみよう。本書は研究対象のみならず方法論をみても、L・ダストンとK・パークによる『驚異と自然の秩序：1150-1750年』(1998年)の系譜にある。つまり十六・十七世紀の思想史を、哲学や科学の狭い枠組みのなかで理解するのではなく、神学史、科学史、医学史、芸術史、書物史といった広い枠組みのなかで理解していくものである。これこそが、先述のA・グラフトンが広めたといってもよい、インテレクチュアル・ヒストリーの手法なのである。さらに、ヨリンクの著作へのひとつの返答として各方面から高い評価を得ているS・クスカワの『自然の書物を描く：十六世紀人

体解剖学と医学的植物学におけるイメージ・テキスト・議論』（シカゴ大学、2012年）を挙げることができる。興味深いことにヨリンクは研究の課題として、初期近代における医学・自然科学の書物にみられる図像の分析を挙げており、まさにクスカワがその著作をもって答えているといえるのではないだろうか。日本でもヒロ・ヒライ、小澤実編『知のマイクロコスモス—中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』（中央公論新社、2014年）には、菊地原洋平の「ルネサンスにおける架空種族と怪物—ハルトマン・シェーデルの『年代記』から」が含まれており、インテレクチュアル・ヒストリーは今後とも目が離せない学術領域であることは間違いない。

本書は初期近代の自然観の変遷をその宗教・神学的な文脈のなかで読み解いていく非常に力強い試みである。また、従来の物理学や化学ではなく、博物学や昆虫学の発展を通してキリスト教と自然科学の関係を明らかにしていくヨリンクの斬新なアプローチから学べることは少なくない。本書は、初期近代ヨーロッパにおける宗教と科学の関係に興味をもつ者であれば必読すべきものである。